

## 武蔵野日曜集会 復活節

## 復活の生命

——マルコ第16章1～18節——

1976年4月18日

小池辰雄

驚嘆驚倒して読む 御霊の世界に入る 御霊の世界に入る なんぞ我を棄てたまいし 彼らを赦せ お前たちは私に躓くよ 天道地路 四大元より主無し 観念のキリスト教ではだめ 信じてバプテスマを受くる者は救われるべし 自由自在な不思議な世界 発しては霊言霊行となる

## 【マルコ16・1～18】

1安息日終りし時、マグダラのマリヤ、ヤコブの母マリヤ及びサロメ往きて、イエスに抹らんとて香料を買い、<sup>ひとまわり</sup>2一週の首の日、日の出でたる頃いと早く墓にゆく。<sup>3</sup>誰か我らの為に墓の入口より石を転ばすべきと語り合いしに、<sup>4</sup>目を挙げれば、石の既に転ばしあるを見る。この石は甚だ大なりき。<sup>5</sup>墓に入り、右の方に白き衣を著たる若者の坐するを見て甚く驚く。<sup>6</sup>若者いう『おどろくな、汝らは十字架につけられ給いしナザレのイエスを尋ねれど、既に甦りて、此処に在さず。視よ、納めし処は此処なり。<sup>7</sup>然れど往きて、弟子たちとペテロとに告げよ「汝らに先だちてガリラヤに往き給う、彼処にて謁ゆるを得ん、曾て汝らに言い給いしが如し」<sup>8</sup>女等いたく驚きおののき、墓より逃げ出でしが、<sup>おそ</sup>懼れたれば一言をも人に語らざりき。

<sup>ひとまわり</sup>9一週の首の日の払暁、イエス甦りて先ずマグダラのマリヤに現れたもう、前にイエスが七つの悪鬼を逐いだし給いし女なり。<sup>10</sup>マリヤ往きて、イエスと偕にありし人々の、泣き悲しみ居るときに之に告ぐ。<sup>11</sup>彼らイエスの活き給える事と、マリヤに見え給いし事とを聞けども信ぜざりき。

<sup>12</sup>此の後その中の二人、田舎に往く途を歩むほどに、イエス異りたる姿にて現れ給う。<sup>13</sup>此の二人ゆきて、他の弟子たちに之を告げたれど、なお信ぜざりき。

<sup>14</sup>其ののち十一弟子の食しおる時に、イエス現れて、己が甦りたるを見し者どもの言を信ぜざりしにより、其の信仰なきと、其の心の頑固なるを責め給う。<sup>15</sup>斯て彼らに言いたもう『全世界を巡りて凡ての造られしものに福音を宣伝えよ。<sup>16</sup>信じてバプテスマを受くる者は救われるべし、然れど信ぜぬ者は罪に定めらるべし。<sup>17</sup>信ずる者には此等の徴、ともなわん。即ち我が



名によりて悪鬼を逐いだし、新しき言を語り、<sup>18</sup>蛇を握るとも、毒を飲むとも、害を受けず、病める者に手をつけなば癒えん。

●驚嘆驚倒して読む

「安息日終りし時、マグダラのマリヤ、ヤコブの母マリヤ及びサロメ往きて、イエスに抹<sup>ぬ</sup>らんとて香料を買い、<sup>2</sup>一週<sup>ひとまわり</sup>の首<sup>はじめ</sup>の日、日の出でたる頃いと早く墓にゆく。

ここに一番先に、「マグダラのマリヤ」という人名が出ている。マグダラという所はガラヤ湖の西岸のまん中あたり、少し北の方で、ティベリアとカペルナウムのちょうど間くらいな所です。「マグダラ」というのはアラミ語では――アラミ語というのはキリストの直かに使った言葉です――「ミグデラー」と言つて「塔」という意味です。その当時は寒村ではなくて、ガラヤ湖畔の四つの町の一つと言われるくらいで、土器を造つたり、染色、魚の燻製などをして、地中海の方面にまで持つていく。そういう商業的な都市であつたといふことです。

「マグダラのマリヤ」という言い方を一字でいうと、「マグダレーナ」――ギリシア語では「マグダレネ」――と言う。「マリヤ」という言葉はもともとアラミ語では「マリアーム」と言つて、語尾に「M」がある。モーセの姉さんの名前に「ミリアム」というのがあるでしょ。ヘブライ語では「ミリアーム」という。

「七つの悪鬼に憑<sup>つ</sup>かれた」

というのは、ある意味においては、悪鬼に狙われるような女性ですから、なかなか魅力のあつた女性であつたと思われます。画家が大体、そういったような具合に描いている。しかし、これはキリストに本当に救われた。「七つ」というのは、本当の数の七ではなくて、「多い」という意味です。

「ヤコブの母とサロメ」の「サロメ」はあの悪いサロメではない。「一週<sup>はじめ</sup>の首の日」というのは、もちろん、ユダヤでは、安息日は金曜日の夕方から土曜日の夕方までで、それが終つた翌日なので、ちょうどこちらでいうと、日曜日の朝というわけです。大体、6時前後だと思われます。

<sup>3</sup>誰か我らの為に墓の入口より石を転<sup>まろ</sup>ばすべきと語り合ひしに、

「誰が石を転がしてくれるだろうか。とても私たちにはあんな大きな石は転がすわけにいかない」

と語り合つていた。女の人ですからね。

<sup>4</sup>目を挙ぐれば、石の既に転ばしあるを見る。この石は甚<sup>はなは</sup>だ大なりき。

これは、マタイ伝によりますと、

「さて安息日おわりて一週の初の日のはの明き頃、マグダラのマリヤと他の



マリヤと墓を見んとて来りしに、<sup>2</sup>視よ、大なる地震あり、これ主の使、天より降り来りて、かの石を転まろばし退け、その上に坐さしたるなり。<sup>3</sup>その状は電光のごとく輝き、その衣は雪のごとく白し。<sup>4</sup>守まもりの者ども彼を懼れたれば、戦おのきて死人の如くなりぬ。」(マタイ28・1～4)

とある。私が『無者キリスト』に書きました霊震です。霊的な震動が地震を起こしたわけで、もとはこの霊震である。霊的な力がそれをした。キリストの復活の力と言っても差し支えないわけです。十字架上でキリストが叫べば、至聖所の幕が二つに切れてしまつて、旧約の宗教はこれで「アウフヘーベン」してしまつた。「破られかつまた満たされた」ということです。この御霊の世界というものは、素晴らしいことが時々起きるわけです。

「守まもりの者ども彼を懼れたれば、戦おのきて死人の如くなつた」

というのだから、もの凄いいことが起きた。

<sup>5</sup>墓に入り、右の方に白き衣を著きたる若者の坐するを見て甚いたく驚く。

天使のことです。次元の違ったものがそこに現れますから、驚く。私たちも、聖書は驚嘆驚倒して読まなければ本当は読めない。聖書を驚嘆驚倒しないで読めるのは、本当は読んでいないわけです。そういう聖書の現実、ことに福音書は、我々の相対的な日常現実とは違う。キリストのしたり言ったりなさっていることはみんな高次元の、絶対次元からの現象ですから。まあ、それを

「どうだ、こうだ」

と頭でもつて解釈して研究したつて、それは始まらんですよ。

### ●御霊の世界に入る

<sup>6</sup>若者いう『おどろくな、

天使が言うのに、「驚くな」と。いつも私が申し上げているように、「驚くな」というのは、本当は「驚け」です。ところが、本当にこの世界に入ると、驚きが喜びになるから。そこで、「ただ、驚いているな」

というわけです。この「驚くな」の奥は、

「この現実、これが本当の世界なんだぞ。むしろ、喜べ」

ということ。

汝らは十字架につけられ給ひしナザレのイエスを尋ねれど、既に甦りて、  
此処こゝに在いまさず。

キリストは十字架につく前にもう二回も、

「自分はこの苦難を受けて、三日目に甦る」

と、復活のことをちゃんと予言しておられる。キリストは十字架につくこともちゃんと知っている。自分を裏切る者が弟子たちの中にも分かっている。



ユダの中に妬みの根性が入った。ユダというのは優れた弟子ですから。そういう悪魔の使いが来ていることも分かっている。だから、キリストはユダに、

「お前の為すべきことをしろ」

と。ということとは、

「私を裏切って、ローマ兵に渡せ」

ということですよ。そういう十字架にかかることも分かっている。それから、復活もちゃんともう知っておられる。ラザロを甦らせたキリストですから。もの凄い霊的生命を持っておられる。変貌の山でもって変貌してしまった。モーセとエリヤが現れて彼と語ったという。これはもう復活のキリストの予表ですからね、みんな。まあ大変な現実です。

そういうこの聖書の現実をいい加減な気持ちで読めないわけです、私たちは。これは本当に冥想し祈り入らなければ、本当は聖書のそういう箇所は過ぎていくことができない。だから、

「降参しなければ入れません。どうにもなりません」

ということ。

「そんなことがあるでしょうか。聖書に書いてあるから、仕方がないから信じておきましよう」

なんて、そんな気持ちだったら、ひとつもだめです。

「カトリックではどう解釈しているか、プロテスタントではどうか」

なんてことをいくら研究したってだめだ。

もう、キリスト直結でなければ。私みたいにバカになって、聖書に書いてあることをそのまま受けとって、その現実に入ると、私みたいな霊的でない男が本当の御霊の世界に入るからおかしい。自分で不思議でしようがない。

● なんと我を棄てたまひし

そういう復活もちゃんと予言しながら、キリストは、

「なぜ、私をお棄てなさるか」

とも言われた。だから私は、

「組織神学ではない。神の真理の世界はドラマである」

と言う。

「なぜ、この私をお棄てなさるか」

と、十字架上でもって彼は叫ばれた。これは神の義が立たんがためです。

「自分は神さまの義を立ててきた。貫いてきた」

と。

「神よ、汝は然り」





と言うときには、自分に対して「否」と言っている存在です。本願を肯定しているのが、  
「御意を成させたまえ」

ということです。キリストは本願に生きていた。自分の小さな願いは捨ててしまった。

「わが願いにあらず、汝の願いを成したまえ」

と、十字架の杯を受けられた。これは英雄中の英雄ですよ、キリストは。天の十二軍を呼べば、ローマの兵隊をやつつけることができたんだ。けれども、それをしなかった。

「然り」

と神に言ったその生き方が義であつて、

「その義人は一人もない。ただイエス・キリストだけである」

とパウロが言ったのがそのこと。パウロが始めは自分を義人と思っていた。神に対して非常に熱心であつたから、キリストを信ずる者を迫害していた。神に対する熱心は、これはパリサイになる。だから、パウロはパリサイの筆頭でした。いわゆる信仰熱心、

「信仰のみの信仰」

なんてやっている無教会は、

「自分たちの信仰こそ本ものだ」

と思っている。信仰を私している。とんでもない。信仰は何ものでもない。

「神さまが、キリストが一切である」

ということに本当に自分を投げかけているのが、もし信というなら信だ。信なんて言わなくていい。私はだから、

「絶信の信、賜りたる信である」

と言う。これは親鸞の信仰がそれです。

「弥陀の御もおしによって」

という。私はあの『歎異抄』とルターの『クリスチャンの自由』とは東西の双璧だと言いました。

そういう義を生きた。だから、この義を神さまに代わって叫んだ、その逆説的な言葉が、

「なんぞ、我を棄てたまひし」

なんです。

●彼らを赦せ

それから、義の叫びと同時に今度は、愛の叫びです。

「彼らを赦してやってください」

と。「絶対矛盾の自己同一」という、「義と愛」なんだ。単なる「痛み」ではない。愛です。「彼らを赦せ」と。十字架にかかっているから、この言葉が言える。十字架にかかっていなければ、「彼らを赦せ」とは言えない。キリストはこの贖罪の愛を、身をもって表した。だから、



キリストは黙っていらっしやってもよかった。けれども、分からないから、

「赦してやってください」

と言われた。我々罪びとを完全に担っている二千年前の言葉はフレッシュに今、現に我々に響いている。

十字架が、何といっても土台なんです。そういう、義と愛は——よく神学者が使う、いわゆる「緊張関係」なんてものではない。そういう表現もできるでしょうけれども——完全には分けることのできない義にして愛である。

このキリストですから、地上の肉体よりもっと凄い霊体をもって甦れたのがこの甦りの姿です。ルカ伝に書いてある。復活のキリストが甦れて、

「何か食べるものがあるか」

と。お魚があつたので、それを焼いて、キリストは食べた。これは本当ですよ。私はいわゆる霊的な人間ではないけれども、これは本当だということを端的に受ける。ところが、一流の神学者たちのグループに私はいたけれども、これを笑ったから、

「では、あなた方と私は袂<sup>たもと</sup>を別つ」

と言つて、私はそのグループから出てしまった。こと聖書の真理になつたら、一步も譲らんですよ、私は。

この甦りのキリストの変幻自在は、幽霊ではない。トマスが幽霊かと思つたから、

「では、私の釘の痕を見る」

と。エマオ途上の二人の旅人と歩いた「第三の旅人」と私は書きましたね。あれはちゃんと足があるんですよ。幽霊みたいに書いてある絵もあるけれども、そうじゃない。これはもう霊体の世界ですから。だから、まずもう限りなくキリストの中に入っていかなかったら、地上では私たちはどうせ三日月ですわ。三日月だけれども、これは本当の三日月だから、必ず満月になる。上弦の月ですよ、下弦の月ではだめです。満ちゆくところの月です。不完全における未<sup>み</sup>完成<sup>けい</sup>の完成<sup>けい</sup>ということ。未<sup>み</sup>完成<sup>けい</sup>交響<sup>きやう</sup>楽<sup>がく</sup>というのがあるが、あれは余韻を持っているね。

ドイツは、あのゲートが出たところは絢爛たる人物が現れた。カント、ヘーゲル、フイヒテ、シェリング、シュライエルマッハー。ゲート、シラー。ベートーベン、シューベルト。ところが、その時のドイツはどうですか。まだ国家的統一はない。フランス革命があつて大騒ぎ。ナポレンがドイツを蹂躪して惨憺たるドイツです。しかし、そのときにドイツの精神文化は本当の花を咲かせていた。ドイツ魂です、これ。

日本人は何ですか。問題はただ表面的な経済と政治の問題ばかり。魂の世界はどうしてしまつたか。学者も権威を持たない。伝道者も本当の聖霊の器が少ない。もう、あなた方は誰であろうとも——人間的な尺度ではないですよ——本当に御霊の人になってください。そうしたらば、自在に本当に人を動かしていく。もう自信ならざる自信が来ますから。



●お前たちは私に躓くよ

視よ、納めし処は此処なり。<sup>7</sup>然れど往きて、弟子たちとペテロとに告げよ

ところが、弟子たちは、

「そんなことがあるか」

なんて言っている。キリストにさんざん予言されていたながら。直弟子たちといわれながら、

「お前たちは私に躓くよ」

とキリストは言われた。その通り、彼らは躓いてしまった。我々自信が彼らと同じ躓きなんだ。聖霊が来るまでは、本当に受けとることができない。受けとったような顔しているけれども。

「汝らに先だちてガリラヤに往き給う、彼処<sup>かしこ</sup>にて謁<sup>まみ</sup>ゆるを得ん、曾<sup>かつ</sup>て汝らに言い給いしが如し」<sup>8</sup>。女等いたく驚きおののき、墓より逃げ出でしが、懼<sup>おそ</sup>れたれば一言をも人に語らざりき。

これはよつぽどショックを受けたね。ガタガタしちやった。

<sup>9</sup>一週<sup>はじめ</sup>の首<sup>あかつき</sup>の日の払暁、イエス甦<sup>よみがえ</sup>りて先ずマグダラのマリヤに現れたもう、前にイエスが七つの悪鬼を逐<sup>おそ</sup>いだし給いし女なり。

私は今日、よほど「マグダラのマリヤ」という題にしようかと思っただけです。そういう題で話したことはまだないですけども。

これはマグダラからずっと、キリストがエルサレムに来るとき、女の人たちはたくさんいましたが、その群衆の中に彼女はもちろん混じっていた。そして、キリストに救われたことを本当に身をもって彼女は感謝した。いろんな意味において彼女はキリストに仕えていたわけです。弟子たちは躓いても、かえってこの一女性が信実を貫いているんです。信実の信は「トロイエ」です。信じぬいているわけです。ロダンがこのマグダラのマリヤが十字架のキリストにしがみついている大胆な彫刻を造ってますけれども。一番先にこのマグダラのマリヤに顕れたということは、いかにキリストがこの女性の信、100%の信を受けおられたかと。その気持がそこに分かるわけです。

まあ、復活のキリストの、昔からの研究の本に、

「七つの悪鬼に憑かれたようなやつだから、この女性は何か少し精神状態がおかしくなって、幻を見たのだろう」

なんてなことがよく書いてあった。そんなことではない。

<sup>10</sup>マリヤ往きて、イエスと偕にありし人々の、泣き悲しみ居るときに之に告ぐ。

キリストは十字架にかけられて、極悪人の一人として悲惨な最期を遂げてどうにもならんと言って、絶望の悲しみの中にみんないたわけだ。弟子たちも散ってしまった。

「しょうがないな。これはメシヤかと思っただけど、そうじゃなかった」  
なんて。



11 彼らイエスの生き給える事と、マリヤに見え給いし事とを聞けども信ぜざりき。

「彼らは信じなかった」と書いてあるでしょ。

12 此の後その中の二人、田舎に往く途を歩むほどに、イエス異りたる姿にて現れ給う。13 此の二人ゆきて、他の弟子たちに之を告げたれど、なお信ぜざりき。

これも信じない。受けとらない。

「そんなことがあるか。変だな。お前たちは幻を見たのではないか。少し精神状態がおかしいんじゃないか」と。

### ●天道地路

だから、「キリスト教」なんて言うから間違えてしまうんですね。「教え」だなんて言っているから。「キリスト道」です。道の字も要らないくらいだ。もう、「キリスト」だけ。

#### 「我は道なり」

ですから、キリストという道なんです。キリストという天道なんです。天道地路。私たちは地上にあつて各々の足でもって歩く。一人びとりの歩く路はみんなちがう。ちがわなかったらうそです。自分が神さまに歩まされた路みちというものは、これはみなそれぞれのつぴきならない路を歩かされている。それが天道に即する。キリストに即する。キリストに即するときに本当に地路が歩ける。天道に即する魂にならなければ、地路が歩けないんです、自分の路を本当に。

これを「実存」と言う。キリストという生きた道を自分の中に体しますと、歩く歩き方がのつぴきならない靈法に従っているわけです。人を羨むうらやことも何もいらん。躓いたり転んだりするよ、人間だから。でも、常に新たに進んで行けます。妬みも争いも要らん。

ゲートルは、

「イズムを超えなければだめだ。何々主義なんて言っているうちはダメだ」

と言っている。イズムにはそれぞれの真理性がありますよ。しかし、それは限界を持つている。それを超えなければ、本当にイズムをまた支配することがでないです、超えた世界に入っていないければ。それぞれのイズムの善さを自由自在に使えるのはイズムを超えた人です。ただイズムを否定しているのではない。

浪漫主義、理想主義、現実主義。いろいろないいでしょう。政治の中にもいろいろな主義がある。それぞれ真理性を持っています。けれども、それを超えなければ、それを本当に正しく認識することも使うこともできない。単なる否定ではない。

ところが、自分を、そのイズムを絶対視して、何のかんのやるから、争いになって、結局すべてが硬化現象。もうはつきりしているんだ、これは。どうして、こういうはつきり





した、ある意味において、「2+2=4」みたいな真理がつかめないかということですよね。ところが、そうなんだ、現実には。

ということとは、要するに福音の無限無量の世界を持つていないからなんです。学問を超越しなければ本当の学問はできない。そういう意味にける自由自在さというのは、勝手気儘とは違う。もう説明できないけれども、これは自分で体していかなければだめなんだ。だからとにかく集会には来なくては。どうしても来れない事情もありましょう。それは仕方がない。この集会というものは——体裁でやっているなら、私は決してこんなことは言いません——語るも聞くも同じこと、ただ本当にこの根源現実の中に入って、いよいよキリストを生きようというだけの話なんだ。そうすれば、相対的な問題を支配することができる、解決することができる。解決しなくても、それにちゃんと処していくことができる。私にも呻きがあります。

「あの人はなぜ来ないんだろうか」

と思うことがありますよね。もつとそう意味においては神経が太くなくては。太くならなくてもいいよ、無になれば。無を賜っているんだから。どうして、キリストを本当に慕わないんですか。キリストは一切の責任を負ってくださいし、力もくださる。

こないだ言いましたね。棟方志功は、

「自分の描いているものに責任を負わない」

と。というのは、彼は動かされて描いているから。そのようなことで、まず、どんなことにも本当に耐えていくことができるし、また、本当に喜びである。

### ●四大元より主無し

まあ、復活の生命の世界に入りますと、死んでも死なない。

「いつたお仆れても、私は次の隣の部屋へ行くようなものですよ」  
というような境地になるわけです。

今から約千六百年前の中国に、僧肇そうじやう（374～414）という学僧がいた。これは仏門に帰依して大いに勉強していた。彼は羅什らじゆさん三蔵の第一の弟子であった。ところが、こういう事件ばかりありませんけれども、王さまの怒りに触れて、死刑の宣告を受けた。そこで、僧肇は、

「私は死にます。しかしながら、七日間だけ猶予をいただきたい」

と。そこで、彼は獄につながれて、その一週間のうちに『法蔵論』を書いた。自分の使命を果たしたいからだね。あとは命はどうでもいいと言うんだ。そして、従容として刑場の露と消えた。ときに41歳といえます。大変な人だな。それで、処罰される臨終に次のような遺偈いげを残した。遺言の言葉です。

「四大元しだいもとより主無し、

五陰本来空ごおんなり、



こうべも  
首を將つて白刃に臨めば、  
猶春風を斬るが如し」

四大は——地・水・火・風です——元より主無しと。「元主無し」とは、どこから造られて、どれに支配されているということがないということです。

「五陰本来空なり」

と。「五陰」というのはこの相対界のことです。この相対界は本来、空である。死んだ生きた、なんのかんのと、人間のそういつた相対界は空である。

「首を將つて白刃に臨めば」

即ち、首を斬られるその白刃に自分の首を差し出せば、

「なお春風を斬るが如し」

と。春風を斬るようなものだ。即ち、

「自分の首は飛ぶかもしれない。けれども、その白刃は私の首を斬っても、ちょうど春風を斬るようなもので痛くも痒くもない。涼しいくらいなものだ。私の首はもうどつちでもいい。体に付いていまいが、そんなことは問題ではない」

と。まあ素晴らしい句です。やはり、仏道や何かに本当に打ち込んだ人たちの魂はそういう境地にまで入るね。快川和尚の、

「火もなお涼し」

なんて言っているのと同じだ。私たちもキリストの生命を本当に——「復活の生命」と題しましたが——

「このキリストの生命を本当に生命しているならば、春風を斬るが如し。涼しい気持で向う側に、隣の部屋へ入っていく。天界の天のお茶でも飲みに行こう」

てなわけだ。これは平常の、私たちの信がそのような根源の現実を、相対界にありながら絶対界を歩いているような魂でなければ、「信仰」なんて言ったってしょうがない。「信仰のみの信仰」なんて、信仰を何ものかと思つてね。

皆さん、本当にうれしくありませんか、この世界は。たまらんじゃないですか。

### ●観念のキリスト教ではだめ

ゲーテの『ファウスト』の中の言葉に、

「自分はいろいろなものを研究した。法学も医学も哲学も神学もやった。けれども、前と同じように元の木阿弥のなんと惨めな馬鹿者ではないか」

と。こんなものを研究したけれども、なにもだめだ、どうにもならんと。

「何も知ることができないということが分かった」

と。ソクラテスの自覚です。ゲーテも始めの方で書いている。ギリシア人はそういった知



の世界で行き詰まる。ユダヤ人は行為の世界で行き詰まる。だから、パウロが、

「ああ我悩める人なるかな。この死の体<sup>からだ</sup>より我を救はんものは誰ぞや」

と。行為の世界、道德の世界、また学問の世界で、みな人間は生き詰まり。どうしたらいいんですか。道德を完成するもの、超道德の世界、超学問の世界、これは福音だけが与えてくれる。

ゲーテが『ファウスト』の中で、もういよいよこれは絶望だと。口に毒杯を付けた瞬間に、復活節の子どもたちの甦りの歌を聞いて、飲むことをやめた。ゲーテという人は小さい時からもちろん教会にも行きましたし、聖書はよく読んだ。終生、聖書を愛読した。彼らしく読んだ。そこに天使のコーラスがある。

「キリストは甦りたまえり。」

それは朽ち果てるところの存在、そいつた胎の中から甦った」

と。この地上の朽ちゆくところの土壤からキリストは甦りたまえりと。

「いろいろなこの世の絆<sup>きずな</sup>からお前たちを解き放ち、

いろいろな行為をもって神さまをほめたたえる人たちに、

愛を証する人たちに、

はらからのようにして困っている人たちに食物を与える人たちに、

伝道して歩き回っている人たちに、

喜びを約束する、そいつた人たち、

あなた方にこそ、本当の先生即ち、キリストは近いのだ。

彼はそこにいたもつ」

と。キリストが本当に近よってくださるのは、そのようにして事実、証をしていく連中に對してだということを、このゲーテが言っているわけです。観念のキリスト教ではだめだぞというわけです。

### ●信じてバプテスマを受くる者は救わるべし

それで、この十一弟子が食べていた時に、

14 其ののち十一弟子の食しおる時に、イエス現れて、己が甦<sup>かたくな</sup>えりたるを見し者どもの言を信ぜざりしにより、其の信仰なきと、其の心の頑固<sup>かたくな</sup>なるを責め給う。

復活のキリストが怒ってしまった。なんだと。そして、

15 斯て彼らに言いたもう『全世界を巡りて凡ての造られしものに福音を宣<sup>のべつた</sup>伝えよ。

16 信じてバプテスマを受くる者は救わるべし、

キリストはバプテスマを施した。そのバプテスマはもちろん聖霊のバプテスマです。ところが、普通のキリスト教会では、それを水のバプテスマにしているでしょ。これは聖霊



のバプテスマです。

「キリストを受けとつて、聖霊のバプテスマを受けるものは救われるべし」

ということですよ。私たちは、聖霊のバプテスマはなにも特別に洗礼式なんてことをやらない。集会を通して御霊のバプテスマを皆さんは受けている。私たちは十字架のキリストを本当に受けたら、御霊のバプテスマを受ける。パウロが、

「われキリストと共に十字架せられたり。もはや生くるにあらず」

と。私も相変わらず生きてますよ。相対的な私は生きてますよ。だけれども、絶対的に私はキリストと共に十字架につけられているから、そこにやってくるのは聖霊の世界です。

「キリストわがうちにありて生き給うなり」

とパウロは言っているじゃないですか。

「我もはや生くるにあらず。されど、キリストわがうちにありて生き給うなり」

と。全くこれはドラマです。自分は死んでいる。けれども、本当は生きています。死んでこそ生きる。そのような事態である。

### ●自由自在な不思議な世界

皆さん、どしどし本当の世界に進んでください。何といつても、使徒の中ではパウロが一番健全につかまえていますから。いいですよ、ヨハネが好きならヨハネでも。ヨハネの中にももちろん十字架がある。パウロほど十字架のことは言ってませんけれども。私は人間的にはむしろヨハネ的な人間かもしれない。ヨハネを読めばヨハネとなり、パウロを読めばパウロとなり、ヤコブを読めばヤコブとなり、ペテロを読めばペテロとなる。自由自在だ。これが本当に不思議だね。妙な好き嫌いでなくなってしまう。

それはキリストの世界に本当に入るから。無色透明の世界に入ると、無限色を持っているから。だから、カーネーションを見ればカーネーションとなり、ユリを見ればユリとなる。雲を見れば雲となる。大自然の如くなる。嵐なんてのは好きだよ。もの凄い勢いで回転している。生命的だ。けれども、無風も好きだよ。そういうように、こだわらない魂になれるんです、この御霊の世界に入ると。御霊と言うと、聖霊と言うと、

「これはとにかく聖なるものだから、大変だ。私は汚らわしくなってしまうからい  
かん。自分を何とかしなくては」

なんて。窒息してしまうよ、そんなことしたら。御霊は愛の世界で、光の世界で、熱い世界ですから。

そういうわけで、さきほどの、

「四大は元主無し」

ということ。四大の地水火風は自在であるんです。地は、大地は大愛を表している。大地は一切のものを担っている。汚いものも何でも、固いものも何でも全部、大ビルディング





だって何だって全部、これを背負っているじゃないですか、大地は。もの凄いです。地というのはどん底の力の愛の世界です。あとは、水・火・風は全部、聖霊のことではないですか。聖霊は水の如く、風の如く、火の如く。だから、全体で愛の聖霊になってしまう。地・水・火・風を冥想するだけでもう、福音の世界をつかんでしまうですよ。

「ごおん五陰本来空くうなり」

と。相對界なんてものは空だと。

「空即是色、色即是空」

ということも言えるし。相對界において実は絶対なものが見えるし。ただ儂はかないなんて言っていない。皆さん、何を読んでも、ちゃんとそれをオリエンテーションできるんですよ。

「どうもこいつはかなわないな」

なんて、それはかなわないような言葉や概念は学問の世界ではあるでしょう。それさえちよつと分かれれば何ということはないんですよ。それから、御霊のバプテスマを受けますと、そういった罪に定められることがなくなってしまうて、

然れど信ぜぬ者は罪に定めらるべし。<sup>17</sup>信する者には此等の徴、ともなわん。

即ち我が名によりて悪鬼を逐いだし、

「聖名により出でよ」というわけだ。

新しき言を語り、

「新しき言」というのは異言です。また、異言ばかりでなくとも、何か示された新しい言葉が出てくる。

<sup>18</sup>蛇を握るとも、毒を飲むとも、害を受けず、パウロがそれを実証しました。

病める者に手をつけなば癒えん。

私も幾度もそれをやらせられております。

●発しては靈言靈行となる

皆さん、勇ましく進んでくださいよ。キリストの福音の世界は本当に人を救ってやまないとこの事の態ですから。

「私にはまだまだです」

なんて、まだまだではない。今即刻、行くんです。もうキリストに全託して、自分を投げ入れてごらんさい。頭で考えているうちはだめ。とにかく、今は頭でつかちが多くてしようがない。とにかく、全存在、全的ということが大事です。知・情・意なんて分けるのではない。女の方は直感的、全的な角度が、むしろ女性の方が多いね。男性はすぐ分裂する。

「こうだ、ああだ。何だかんだ」

と、理屈ばかりこねてね。だから、女性の方が信仰のすじはいい。マグダラのマリヤな



なんていうのはまさにその典型と言ってもいいわけです。キリストに救われて、まっしぐらに信じぬき、キリストを愛しぬいていった。

「徴」というのは、私が「徴の宗教」といって、一番先に書きましたね。ジンボール（徴）。  
「ユダヤ人は徴を求める」

というけれども、あの「徴」ではないです。我々自身が即ちキリストの徴であり、キリストの印形である。キリストの御霊を宿している者はキリストの生ける徴です。パウロは、

### 「十字架の徴」

とも言いました。ガラテヤ書の終りの方で。

### 「私を煩わすな」

と。即ち、徴であることが証人であることです。キリストの徴であることが証人、証者。手足に表れては行為となり、口に表れては言葉となる。言葉と行為は同じことですから。

「言うは易く行いは難し」

なんて、そういう分析的な判断をするから、いつまでたってもだめなんです。奥の世界に入ってごらんさない。キリストの生命が来ていれば、甦りのもの凄い生命が来ていれば、発しては霊言となり、発しては霊行となる。

それは事業をしようが、学問をしようが、人を癒すことをいたしましょうが、皆さんがなさることは何でも、この言行は元から来て、表れては言となり、表れては行となるだけの話で、「言うは易く行いは難し」なんて、そういう判断は根源の世界を知らないから、そういうことを言っている。言うのは決して易くはないですよ、本当の言葉というのは。

キリストの生命をマグダラのマリヤはむしろ本当に受けとっていた。他の連中は、弟子たちは、かえって躓いた。あの「レプタ二枚」のところでも私は書いたでしょ。

「あの財布を傾けてレプタ二枚を、お賽銭を投げたこの婦人は弟子たちよりも本当の弟子であつた」

と。とにかく、本ものの世界を本当に見、かつまた体していかなかったら、つまらんですよ、人生は。どんな現実にあつても、絶対にへこたれなくなるですよ、パウロと同じように。

### 「為んかた尽くれども望みを失わず」

という。私のところでこの集会に連なっていて、どうしてそれに気がついてくれないかと、出て行った人たちを私は情けなく思う、正直。この破れ器を通して何が発しているかという、そこを見ないから。私という破れ器を見ているからみんな躓く。だめだよ、そんなのは。福音は破れ器を通して表れるんです。整ったものには、福音は表れない。道徳が表れ、哲学が表れるでしょうが、福音は表れない。

